第35回 日本臨床微生物学会総会・学術集会

セミナー名　ランチョンセミナー14（東ソー株式会社）

演　題

臨床微生物検査の視点から考える
肺抗酸菌症の診断・治療

座　長　**長沢 光章先生**
（国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科）

演　者　**吉田 志緒美先生**
（国立病院機構 近畿中央呼吸器センター）

日　時　**2024年2月11日（日）**
12:20～13:20

会　場　**第7会場**
（パシフィコ横浜ノース 4F「G401」）

本ランチョンセミナーは整理券制です。

1）参加を希望されるセミナーの整理券をお取りいただき、セミナー入場時にお弁当とお引換えください。
2）整理券配布はお一人様1枚限り、先着順のうえ、無くなり次第、終了となります。
3）入場は整理券をお持ちの方を優先させていただきます。

配布場所：ランチョンセミナー整理券配布所
（パシフィコ横浜ノース 1F）
<参加受付付近>
配布時間：2月11日（日）8:00～11:50
（なくなり次第終了）
【注意事項】整理券はセミナー開始5分後に無効となります。

共催　第35回日本臨床微生物学会総会・学術集会 ／ 東ソー株式会社

要旨

臨床微生物検査の視点から考える肺抗酸菌症の診断・治療

国立病院機構　近畿中央呼吸器センター

吉田　志緒美 先生

本邦の非結核性抗酸菌症の多くは呼吸器感染症あるいは医療関連感染症として認識されている疾患であるが、近年罹患数が増加している。特に、呼吸器疾患は多剤併用療法を必要とするものの、効果的な治療薬が少ないため、臨床的に難治な症例が多い。薬剤感受性も菌種間で違いがあり、従来は*M. avium*と*M. intracellulare*を併せてMAC(*M. avium-intracellulare* complex)とされてきた肺MAC症は、これら2菌種の各種薬剤に対するMIC分布が異なること、臨床像や予後も異なることなどから、MAC症と総称することは適切ではなく、わが国の肺NTM症を惹起する代表的な2菌種として捉えるべきである。同様に、*M. abscessus* speciesの亜種である*M. abscessus* subsp. *abscessus*と*M. abscessus* subsp. *massiliense*も、マクロライドに対する誘導耐性能が異なる、治療奏効性および予後が異なることなどから、亜種鑑別と誘導耐性の確認を行う必要がある。また、臨床的に同一の菌種であっても菌株ごとに異なる場合があり、適正治療には症例ごとに菌種を同定・分類し、定量的な評価（MIC測定）が要求される。しかし、基礎となるデータの信頼性が薬剤間で異なるため、MICと治療効果の相関が充分でなく、臨床的意義が解からず評価できない薬剤もある。

肺NTM症の治療効果は、自覚症状、画像所見、喀痰抗酸菌培養の3つの経過から判断するが、①培養陰性化は、死亡の減少と相関する、②持続的な培養陽性は、画像所見が進行しやすい。③細菌学的治癒の症例は、経年的に健康関連QOLが改善する。といった知見から、喀痰培養は治療効果を評価する上で特に重要な検査であり、治療中はできるだけ継続させるべきである。さらに、治療後の再発がまれではないため、診断が確定された後も、病状評価のために定期的に喀痰検査（抗酸菌、一般細菌）を行い、排菌陰性化が達成された後も経過観察（画像、抗酸菌検査）を継続する必要がある。